

スウェーデンにおける パターナリズムと市民的公共性

クリステル・エリクソン&ビヨン・ホリビイ／石原 俊時 訳

序

- 1 中間層のパターナリズムと市民的公共性
- 2 ノルシェーピング (Norrköping) における市民的公共性
- 3 パターナルな諸関係
- 4 製鉄所のパターナリズムと市民的公共性
- 5 上層中間層の家父長の道徳
- 6 工業企業家としての中間層の家父長
- 7 工業企業家でかつ右派政治家
- 8 変化する市民的公共性における新しい家父長

総括

序

19世紀後半および20世紀前半の間、中間層のパターナリズムが、とりわけ主に工業企業主や卸売商、ブルク主などからなる上層中間層のそれが、スウェーデンにおける市民的公共性の形成や転換において重要な役割を果たした⁽¹⁾。20世紀初頭の戯画誌によれば、その外見は特徴的である。明らかにそれは男であった。カリカチュアの中では、しばしば山高帽をかぶり、ビスマルク風のいかめしい口ひげをはやし、見るからに太っていて、そのためにふんぞり返っており、偉そうな風体をしていた。太い葉巻を吸っていることも多かった。

本稿では彼の世界観を論じてみたい。何よりもまず、彼を市民的公共性やそのパターナルな諸関係における変化の中で彼を論じることとする。次にその世界観の中で重要な部分を検討し、最後に工業企業家としての中間層のパターナリズムについて論じてみたい。

(1) 「ブルク (bruk)」とは、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドにおける農村工業、特に一つの村をそれが支配する製鉄所や製材所の特殊な形態である。イギリスやアメリカに相当するものはない。

1 中間層のパターナリズムと市民的公共性

中間層のパターナリズムは、市民的公共性の形成に重要な役割を果たした。市民的公共性は、ユルゲン・ハーバーマスから借りた概念である⁽²⁾。イギリスの歴史家シモン・ガンが指摘しているように、市民的公共性は、ジェンダー秩序を有したブルジョワジーの集合的利害の形態および組織である。その目的は、国家や社会を支配することであり、ブルジョワ・ヘゲモニーを発展させていくことであった。それは、自己の社会観・世界観が標準として通用するように努力することを意味した。同時に、従属する諸集団にその解釈に基づいた関係を打ち立てていった⁽³⁾。国家の力は、国家が19世紀末や20世紀初頭にどのような役割を引き受けたのかで窺われる⁽⁴⁾。支配関係の形成は、社会における階級対立を引き起こした。この対立が諸問題を引き起こすと、国家はこれらの諸問題を解決する責任を負った。20世紀前半において、国家は、かつては家父長とその従属者の間のパターナリズムな関係に埋没していた社会保障や福祉を自発的に引き受ける責任を次第に受け継いでいった。

スウェーデンにおいては、市民的公共性は1830年代に形成されたのだが、その時には、中間層の家父長や上層中間層の他のメンバーは、内と外でのコミュニケーションのための公的な場を必要とした。それは、社会的・政治的権力を強化し実践するためであり、内部の連帯を強化するためであり、そして他にも文化的実践や様々な種類の消費を通じて、規範やアイデンティティを生み出し形成していくためである。その結果、その形成はまた、階層序列において自己より上と下に引かれた他の階級との間の境界線の成立につながった。

ブルジョワジーは、集团的行動の可能性が非常に限られていたスウェーデン史におけるその時代にあって、規範や概念について議論し、これらの概念を伝達し、そして政治的行動を行う公的な場や道具として自由主義的新聞を利用しえた⁽⁵⁾。自発的結社の世界や公的な場での文化は、連帯性やアイデンティティの形成において重要な役割を果たした。いくつかの研究は、劇場やその他の文化施設がどのようにして19世紀半ば以降に建設されたかを示している⁽⁶⁾。同時期に上層中間層は、自発的結社に組織されていた。消費さえも、特に他の社会集団と自己とを区別することにおいてアイデンティティの形成に大きな役割を果たした。富裕な公衆は、買い物を、社会的に限定された者のみが可能である消費を顕示するために利用した。そして最後に、ブルジョワジーの応接室は、娯楽や社交のために利用されたのである。

社会学者のピエール・ブルデューによれば、趣味の良いことは中間層文化・アイデンティティにおいて重要な部分を占めていた。趣味は、公共の場での消費において普遍的となると同時に排他的にもなった。趣味の諸基準は、「趣味を欠く者」あるいは「悪趣味」の者を区別したのである⁽⁷⁾。

(2) J.Habermas 1984. 同じ概念を使うものとして、Å.Abrahamsson 1990 やL.Båtefalk 2000を見よ。

(3) S.Gunn 1999. こうしたヘゲモニーの概念は、B.Horgby 2000でも用いた。

(4) B.Stråth&R.Torstendahl 1992と比較せよ。

(5) Å Abrahamsson 1990.

(6) K.Hallgren 2000; B.Olsson 1994; R.Qvarsell 1988.

(7) P.Bourdieu 1986.

そうしたアイデンティティの政策はまた、物質的な環境においても表現された。大きな都市では、公共空間は建築様式や計画によって秩序づけられた⁽⁸⁾。社会的不調和は、19世紀末および20世紀初頭において最も頻繁に生じた。今や上層中間層は自己の力を顕示しはじめ、そのことが当時のいかめしい建物に形状を与えた。ノルシェーピング (Norrköping) 中心部であるショッピング街のドロットニング・ガータン (Drottninggatan) を観光すると、このことは明らかである。そこは、ホテルや宮殿のような銀行の建物、市庁舎が立ち並んでいる。それらの建物は、世紀転換期に建てられ、重厚な建築様式で特徴づけられている。セードラ・プロメナーデン (Södra Promenaden) の上層中間層の住居も同じ印象を与える。それらの建築はまさにそうした文化的活動を意図したものである⁽⁹⁾。エーレブロー (Örebro) やストックホルム、イエーテボリイ (Göteborg) を歩いても、世紀転換期から存在する街路や主要なショッピング街は、こうした建築物の助けを借りて権力やアイデンティティを示していることを一層感じるのである⁽¹⁰⁾。

工業村落も、同様に上層中間層の文化コードや権力の要求をはっきりと指し示すように建設されていた。これらのブルク村落はしばしばシンメトリックな形状を取るように計画されており、真っ直ぐなメイン・ストリートに沿って従業員の住宅が整然と、殆どの場合長い距離にわたって立ち並んでいた。住宅には屋外便所やちょっとした庭がついていた。従業員の家とブルク主の邸宅は、製鉄所の存立条件でもある水路によって隔てられていた。ブルク社会のまとまりは、外界との粗い境界をなしていた。同時に内部の環境は開かれたものであった⁽¹¹⁾。

エリサベート・ラングランドによれば、上層中間層は、住宅のデザインにおいても階級やジェンダーの階層秩序を打ち立てる一層の努力を示していた。台所は、それらの趣味が肉体を連想させ、肉体的欲求はタブーとされていたので、食堂と切り離された。男性は自分の喫煙室を持っていた。食堂は、重厚な家具と絨毯により男性コードで満たされた。このことは、夕食や晚餐会が食堂で行われ、男性がそこで重要な代表的な役割を果たすことによって説明されうる。喫煙室や食堂は、半ば公的な場なのである。これと対照的に、女性の居間や私室はプライベートな場に属す。それゆえ、そこでの家具は女性的なものであるのである。階級間の境界は、使用人の空間が切り離されていることに見ることができる。使用人は見えてはならないのである。そのように、上層中間層の住居も、市民的公共性の文脈に沿うようにデザインされていた⁽¹²⁾。

市民的公共性は、ジェンダーによって秩序づけられていた。19世紀末、上層中間層の女性は、それ以前に比べてより公共空間に現れ、重要な役割を果たすようになった。このことは、彼女らがフィランソロピー諸団体にますます従事するようになり、公的領域で象徴的な重要性を増したことの結果であった。女性は文化的催しに出席し、社会的に他から区別されるような形で財を消費した。時と場に応じてきちんとした身なりをすることは、一種の挑戦であった。もしきちんとした服装で

(8) H.Scheiban 2002.

(9) B.Horgby 1989.

(10) E.Eriksson 1990.

(11) C.Ericsson 1997.

(12) E.Langland 1995.

なかったならば、文化的な能力の欠如を示すこととなる。衣装は、重要な文化的道具であった⁽¹³⁾。

そのような階層性は、パターナルな諸関係と結びついていて、家庭でも職場でもそうした階層性を見ることができた。外に向かって拡大する社会的生活にとり、世帯の中の奉公人の存在は不可欠であった。彼らは、私的空間でのサービスを提供したのである。妻は、世帯の管理者であり、上層中間層の家庭における殆どの仕事を担っていた奉公人団を指揮した。例えば、子供には乳母がいたのである⁽¹⁴⁾。同様に、企業はいくつかのレベルからなる階層をもったものとして組織されていた。

2 ノルシェーピング (Norrköping) における市民的公共性

19世紀末の上層中間層は、文化的ブルジョワジーと経済的ブルジョワジーの混合であった。経済的エリートは必要な文化的知識を持っていると想定されていた。特に経済的エリートの女性は、この2つのグループの間を橋渡しする重要な役割を果たした。彼女らは、文化資本を持ち、パーティや晩餐会を催して、文化的消費の主要な部分を担ったのである⁽¹⁵⁾。

中間層の家父長が市民的公共性にどのように作用したのかの最初の例は、世紀転換期のノルシェーピングから集めたものである。19世紀から20世紀初頭の産業革命の初期の局面において、ノルシェーピングは、スウェーデンをリードする工業都市の一つであった。主要な卸売商や紡績工場主の家族が、互いに経済的關係で繋がりあい、同じ価値観を持ち、相互事業に参加しあいながら、上層中間層を支配した。彼らはまた、文化的催しにおいて同様の関心を示し、同じ自発的諸団体に参加していた。ピエール・ブルデューによれば、彼らは社会的および文化的資本を共有していたのである。

スワルツ家は、19世紀から20世紀初めにそうした上層中間層で主導的な役割を果たした。その家族は、何世代にもわたって豊富な書簡史料を残している。この史料によって、社会的生活や信念を垣間見ることができる。20世紀初頭ではカール・スワルツ (Carl Swartz) が家父長であった。1904年から17年の間に成立した保守主義政権の下で財務大臣を務め、1917年に短期間だがスウェーデン首相にもなっている。彼がストックホルムで職務をこなしている時、妻のダグマール・スワルツ (Dagmar Swartz) が家政を取り仕切っていた。会社経営や様々な社会関係を束ねる役割も含めてである。家父長の衣装はカール・スワルツによく似合った。多くの他の家父長と同様に、彼の父は彼に責任を全うすることを教えた。カール・スワルツは、この責任が移ることについて母親に手紙でこう言っている。「親愛なる父が母に対する責任を私に移すことを命じたのです。」⁽¹⁶⁾

社会関係が、上層中間層を定義し統合する上で重要な文化的意味を持った。20世紀初頭の1月のある月曜日、スワルツ夫妻は幾人かの知り合いや友人を夕食に招待した。王立愛国協会の金メダルが、スワルツに雇われていた工場長 J.F.ゲーリン (Gehlin) に与えられることになったのである。

(13) S.Gunn 1999,s.17-19; E.L.Björman 1998,s.84 ff,89.

(14) B.Horgby 2000.

(15) B.Horgby 2000.

(16) 1901年12月18日付のカール・スワルツから母親への手紙【Släkten Swartz arkiv; Norrköpings stadsarkiv】。

招待客のリストによれば、夕食のパーティの他の参加者には、市長〔司令官 (kommendör) の称号も有す〕C. J. ストルペ (Stolpe), 市長〔騎士 (riddare) の称号を有す〕E. グレナデル (Grenander) [市長 (borgmästare) は元来市参事会 (magistrate) の長であり、2人存在することもあった。——訳者注], 牧師 J. P. フォーゲルクヴィスト (Fogelqvist), 市助役 C. J. ペッタシューン (Pettersson), 市裁判所判事 T. M. ボート (Bååeth), 市議会議長 C. エーベシュテイン (Eberstein), 市建築家 C. F. マルム (Malm), 市技師 B. L. ヘルストレーム (Hellström), 工業企業家ヨハンエス・リングボリイ (Johannes Ringborg), 工業企業家 G. リングボリイおよびエドヴァルド (Edvard) ・リングボリイがいた。親戚である卸売商 L. リングボリイと卸売商ヨーハン・グスタフ・スワルツは、彼らの妻とともに招かれた。これらの客は、様々な利害を代表する者のうちの幾人かである。

招待リストを見ると、ブルジョワ文化における階層性やパターナルな性格がわかる。スワルツ夫妻は、重要な雇い人のために小さなパーティを開き、市のリーダーのうちの何人かを招待せねばならなかった。それらの称号は社会的階層秩序における位置やテーブルの配置を示した。客たちのうちの幾人かは、飛びぬけた名誉の存在を示す騎士か司令官の称号を有し、そのことが席次に重要な役割を果たしたのである。女性は夫の随伴者であった。名誉ある客は主人の妻をテーブルにエスコートし、感謝の言葉を述べた。夕食会での関係は、社会関係を強化する社会的交互作用の一環であった。贅沢な献立は、社会的交互作用の一部であったのである。

上層中間層は相互に繋がりがあひ、社会的ネットワークをなしていた。妻たちはこれらのネットワークを作り出し維持することにおいて重要な役割を果たした。主人の妻をエスコートするのが最も高い地位にある者であることは、社会的慣習であるばかりでなく、妻の重要な役割を強調する方法でもあった。親戚、家族、友達、仕事関係の者、自発的結社のメンバーは規則的に行われる夕食会で顔を合わせた。結婚式やある場合には誕生日でも大きなパーティが催された。これらの種類の関係が、兄弟のような絆を作り出した。「兄弟」の間では、意思決定のプロセスを簡略化することや、相互の利益に到達することは容易であった。

フィランスロピーの夕べは、音楽、語らい、社交を伴った特に女性中心のパーティであった。女性の世界では、家を訪問しあうことやパーティは社会的紐帯として重要な役割を果たした。親戚や友達は互いを規則的に訪問しあった。訪問者は短期間留まってもよいし、誰かのサマーハウスに数ヶ月滞在してもよかった。子供たちは、夏の間、親戚や友達の家を訪れた。電話をかけることが稀で高価であった時代では、誰もが日常的に手紙を書いた。訪問に際しては、短いメッセージを添えた訪問カードを送った。相互の贈り物、挨拶状、お祝い、お悔やみなどは、そのような関係を強化した。

娯楽や文化を公的に消費することも社会的帰属には重要な役割を果たした。上層中間層は、積極的に参加した。そのうちのある者はまたメセナであって、劇場や町の図書館、美術館の収集を援助した⁽¹⁷⁾。

(17) B.Horgby 2000.

3 パターナルな諸関係

パターナルな関係は、家族、世帯、企業および社会における社会関係の構造を作り出した。企業のレベルでは、19世紀末にパターナルな関係は、父親のような主人と労働者の間の不平等な「契約」として描くことができる。その契約は、フォーマルな形で書かれたものではなく、文書に書かれた個々の雇用契約と一緒にすることは不可能である。パターナルな契約はさらに奥が深いものである。それは、企業内の関係、企業内のコミットメント、責任がどうあるべきか、一方が他方に何を期待すべきかを規定した。

労働者は、広い意味では家父長の世帯に属した。家父長は自己を、労働者や家族に対して労働能力の良し悪しに拘わらず義務を負う父親と見なしていた。このようにして、労働者は、年をとっても、病気となっても、〔その他何らかの理由で〕心身の力を失っても、生存のための最低限のレベルの衣食住を得られる社会保障のシステムに与ったのである。彼等は、工場の住宅に住むことができたのであり、それに加えてわずかながらの年金や疾病給付を得ることができたのである。

ブルク的环境においては、社会保障のシステムは直接家父長〔ブルク主〕から配分された。労働者は、工場住宅や薪その他の現物給付、無料の医療、疾病給付や年金といった形で補助を得たのである。時には家父長は、産婆や学校のためにも資金を提供した。こうした福祉のシステムは、多かれ少なかれ拡大する傾向をもっていた。都市や町では、対面的な関係はブルクのように緊密ではなかった。家父長の責任の一部は、自治体やフィランスロピー諸団体が引き受けた。自由主義的な自発的結社であるノルシェーピング勤労者組合(Norrköpings arbetareförening)は、1860年に設立されたのだが、まもなく市民的公共性および福祉のパターナルなシステムの中に組み込まれた。1870年から80年の間、その団体は、主に労働者や小ブルジョワからなる1400人から1700人のメンバーを擁していた。おおよそ、ノルシェーピングの4分の1から半分の男子労働者がメンバーであった。この団体の目標は、自己教育と自助であった。ノルシェーピングで最大の健康保険事務所であったこの団体の健康保険事務所は、1890年までメンバーの会費とメセナの寄付からほぼ同等に資金を調達した⁽¹⁸⁾。こうした支援は、家父長〔上層中間層〕たちのパターナルな支援の一部であった。フィランスロピー諸団体も、小児病院のような公的施設にも援助を与えていた家父長達からますます支援を受けた⁽¹⁹⁾。このような拡大するフィランスロピー諸団体によるケアは、19世紀末から20世紀初頭にかけての救貧制度を補完する重要な役割を果たしていた。フィランスロピー諸団体によるケアはまた、上層中間層の女性が公的領域に足を踏み出すための重要な前提をなした。家父長達の妻は、1920年代初めにおいても、女性からなるフィランスロピー諸団体を支配した⁽²⁰⁾。

対面的な関係の中で、家父長は、自己に従う者や保護される者の世話をやくことができた。スワルツ家による工場長ゲーリン(Gehlin)を主賓とした夕食会は、その一例である。ゲーリンの親戚

(18) B.Horgby 1989 ; B.Horgby 1993.

(19) B.Plymoth 2002.

(20) Ingemar Johansson の現在進行中の研究による。

の一人が埋葬された時、ダグマール・スワルツは花輪を送っている。遺産の配分に、保護されてきた者もいささかなりとも与ることも期待されたのである。

パターナルな社会保障システムは、フィランソロピーに基づいていた限り、問題がないわけではなかった。家父長の個人的かつ自発的な企図のみが援助を保証した。家父長は気前の良い父でありえたが、労働者を常に辱める暴君でもありえた。このように日常的に尊厳を傷つけられることが、初期の労働運動がパターナルな福祉システムに反対する主要な論拠であった。深々とお辞儀をして挨拶をしたり、がみがみとののしられたり叱られたりしながら、恩恵を受けるべきではないのである⁽²¹⁾。

社会保障のパターナルなシステムの見返りは、よく働き、男性支配のジェンダー秩序を受け入れ、誠実に日々の生活を送り、大小の事柄を決定する父親として家父長を受け入れることであるが、最も重要なことは、ブルクあるいは会社に留まろうとすることである。労働者は、年をとって自活できないようになった時に自分や家族が生き残っていくために、この不確実な保障システムにかけることは合理的な選択であった。年金を受け取れない老人は、親戚の援助や屈辱的な救貧に頼らねばならなかった。頼ることができる様々な選択肢があるとすれば、パターナルな社会保障システムは、救貧のように屈辱と結びつかない一つの合理的な選択肢であった。この論文の後で見るように、社会保障はまた、のどから手が出るほど欲しい熟練労働者を確保し、役に立たせ、会社と労働者の間に個人的な紐帯を作り出す効果的な戦略であった⁽²²⁾。

19世紀後半の機械化の過程を経ると、使用者の中にはパターナルな関係を資本主義的な市場関係に転換することを試みる者もでてきた。会社は、もはや労働者の面倒をみなくなり、ただ労働力商品を購入するのみとなった。このことは、一つには、大企業が生成し、官僚制的な組織が成長する中で人と人との絆が弱まった結果でもあった。というのも、一人の家父長では、すべてを見渡すことができなくなったのである。市場や資本主義的競争を志向することは、多くの家父長が契約を書き換えることを望むようになることにつながる。かつては俸給や恩恵の中に埋め込まれていた様々の形態の保障は、貨幣での代償に変わるか、全くなくなってしまったのである⁽²³⁾。

こうした一方的なパターナルな契約の書き換えは、しばしば労働者の抗議を招いた。時には彼らは労働組合を組織した。その場合、会社は新たな挑戦に立ち向かうこととなり、当初は大抵抑圧や敵対をもって応えた。労働組合との団体協約ではなく、会社は労働者と個人的な合意を結ぼうとした。労働組合に属する労働者は解雇されたり、ブラックリストに載せられたりした。特に1909年の大ストライキ [労使中央組織 (LOとSAF) が初めて正面から対立した大争議。1ヶ月以上にわたり、30万人以上の労働者が参加した。労働組合側が敗北し、LOはメンバー数の約3分の1から半分を失ったと言われる。とはいえ、労働組合運動は存続し、使用者側も労働組合の存在を否定するのではなく、団体協約によって労働市場の秩序化を進める路線を確立していった。――訳者注] の後のブラックリストは、労働者に大きな打撃を与えた。今や慈恵あふれる父親は、厳しく罰を与える側面を露にした。〔しかし〕家父長が、反

(21) C.Winberg 1989.

(22) C.Ericsson 1997; C.Ericsson 2004; B.Horgby 1997,s.58-61; B.Horgby 2000.

(23) B.Horgby 1989, s.39-46; B.Horgby 1993; B.Horgby 1997; I.Johansson 1982.

対者を持つことに合理性を認識し、それと交渉する可能性を見出し、相手が共通する利害も持ちうることに気がつくようになると、多くの会社は、さらに契約を書き換え、労働組合をパターナルな契約の中に組み込んでいった⁽²⁴⁾。

4 製鉄所のパターナリズムと市民的公共性

パターナルな関係は、スウェーデンの製鉄所(ブルク)では強力であった。それゆえ、製鉄所の外観の形状は、概して「ある理念型」に沿ったものであった。建物の配置あるいは建物は、居住地が生産現場に近いという合理性以上の意味を持っていた。ブルクのコミュニティの建物は、製造業のパターナリズムの権力関係を強調することを意図していたのである。建物の構造は、「階層的な権力構造と地域的な共同性」のメッセージを表現した。社会的かつ階層的な境界がはっきりと区分され、風景の中に社会の自明的である秩序が現れた。その秩序の目的とは、「その空間」の中での規律と安定性を維持することである。〔ブルク主の〕邸宅は〔従業員〕の居住地の高みに聳え立ち、一般的には主人がコミュニティすべてを見渡せるように建てられた。その他の〔従業員の〕居住地は、「監視のネットワークが互いをコントロールする」ように計画・配置されていた⁽²⁵⁾。生産の場の風景は、対面的関係に基づき、何ら媒介するものなく直接行使される、パターナリズムの権力の配置を補強するものであった。

こうした建築物の枠組の背後にある、以上のことよりも時には強調されることとなる他の目的は、「我々という感覚 (we-feeling)」を創造するという機能である。製鉄所のコミュニティは、これらの建築物を通じて、個人と社会との間の生き生きとした統一体、すなわち、不可分な社会、有機体として視覚化されるのである。このような光景が眼に見えるということは、主人に、彼自身が住民たちのために形作った理念にそって生活することを強制した。彼は公正な精神を持たねばならないし、良心的でなおかつ厳格であらねばならなかった。彼はまた、実際の采配に長け、エネルギーでなければならなかった。コミュニティの良き模範として、彼は責任と義務への献身を強調した。温情溢れる父親は、強い意志を持った強い人間でなければならなかった⁽²⁶⁾。温情溢れる父親への信頼は、眼に見えている彼自身と結びついていた。それゆえ、彼は、演劇的なパフォーマンスを演じ、多くの上に立つ者が人前を気にして負うであろう役柄を全うせねばならなかった⁽²⁷⁾。この役柄は、将来上に立つ者が子供の時に教えこまれるものである。目下の者の面倒を見るのは、彼の義務なのである。比較的発展した社会保障システムが存在した。先に言及したように、製鉄所(ブルク)の住民に、揺りかごから墓場までの間、提供されるパターナルな社会保障システムである。パターナルなシステムのもう一つの要素は贈り物である。贈り物は3つのカテゴリーに分類しうる。すなわち、特別な努力をしたとか、労働者が怪我をしたとか、子供が病気になったとか、様々な理由によって個人に付加的に与えられる贈り物があった。もう一つの付加的な贈り物は、すべての労

(24) C.Ericsson 1997; B.Horgby 2000.

(25) M.Foucault 2003.

(26) P.Sondén 1925 ; T.Nordlund 2005; C.Ericsson 1997.

(27) C.Ericsson 1997; T.Nordlund 2005.

働者に対するボーナスの支給とか中央で始まった争議に関連して与えられた贈り物とか、より明示的でありえたし、思慮に満ちたシンボリックな意味をもちえた⁽²⁸⁾。これらの贈り物のシンボリックな意味は、そうしたケースでは、「家族」の一員としての意識を確認し、権力を正統化する試みとして解釈されうる。父親は、危機の時代にあつてさえも良き物を分け与えるものだと考えられていた。こうしたシンボリックな意味をもち付加的に与えられる贈り物は、あまねく見られた。より明示的で制度化された贈り物は、夏至の祝祭や、クリスマス・プレゼント、遠足などである。夏至の祝祭は、世紀転換期にはすべての製鉄所で採用され、盛大に催されていた⁽²⁹⁾。この祝いは、製鉄所のオーナーや彼が具現するパターン的な権力行使と緊密に結びついていた。従業員やその家族のために祝宴を催すのは主人であり、贈り物を与えるのは彼であり、彼自身が祭りに参加した。祝宴は、「父親」が気前よく贈り物をおくる「一つの大きな家族」としての社会を表現していた。高度にシンボリックで儀式的な祝祭は、台頭する社会主義運動に対抗すると同時に、地域の「家族への帰属」を脅かしている近代資本主義社会における断片化を食い止める試みとして見ることができる。

5 上層中間層の家父長の道徳

これまで上層中間層の家父長の道徳について触れてきた。ここではその道徳をより体系的に論じてみよう。パターン的な関係は、自分が人の上に立つことが全く当然であり、目下の者の面倒を見るのが自己の義務であると信じている家父長の道徳的な確信からその力を引き出していた。19世紀末および20世紀初頭の家父長の世界観は、しばしば厳格な宗教的道徳に基づいていた。義務と責任が全体を導く概念であった。各個人は、自己の行動に責任を持つのであり、家父長は、自分自身や家族を養う義務を持つのである。

厳格な道徳は、自己や他者の行動を省みる時の基準であった。きちんと働かない者は、現世でも天国でも恩賞に値しないのである。名誉ある生活のための道徳的最低限を果たしていない男あるいは女は、あらゆる恩賞に与るべきでないのである。この種の思想は、個人の行いや道徳のある優先順位に帰結する。上層中間層はダブル・スタンダードの性道徳を持っていた。家父長は、婚外に性的関係を持って良かった（妻はそうでなかった）。有名なスウェーデンの労働者階級の作家モア・マーティンソン (Moa Martinsson) は、生まれた時の名をヘルガ・スワルツ (Helga Swartz) といい、カール・スワルツの娘〔私生児〕であったという。こうした道徳的問題〔上層中間層の二重道徳〕は、しばしば民衆の文化の中で取り沙汰された⁽³⁰⁾。

家父長は、自己の名誉と名前を背負っていた。上層中間層の家族や親戚は、それが汚されないように、この名前を守らねばならなかった。破産、詐欺、道徳的逸脱などは、名前を汚すものであった。この規範を実行できなかった家族のメンバーは、「つらよごし」とされ、公の席から排除されねばならなかった⁽³¹⁾。

(28) C.Ericsson 1997; U.Magnusson 1996; L.Nyström 2003.

(29) U.Magnusson 1996; C.Ericsson 1997; C.H.Tillhagen 1981.

(30) B.Horgby 2000.

(31) 例えば、スワルツ家文書 (Slakten Swartz arkiv; Norrköpings stadsarkiv) を見よ。

道徳の概念はまた、家族観、とりわけ子育てのあり方を導いていた。上層中間層の家父長は、一つの制度としての家族を守る父親であった。上層中間層の子供は、成功するように訓練された。しばしば彼らは公立の学校ではなく私立の学校に通った。それ以外にも、しばしば家庭で勉強やその他についても教育を受けた。ダグマール・スワルツは、学校制度に対して非常に批判的であった⁽³²⁾。

子供に対する厳しい規律を持った教育には、食事の際に黙っていることやきちんと振舞うことも含まれた。丁寧であることは一つの導きとなる規則であった。19世紀末のノルシェーピングの上層中間層の一人は、回想の中で〔丁寧さの〕行き過ぎについて語っている⁽³³⁾。

子供たちは、いつも親の命令を聞く道徳的な模範たるべきことが想定されていた。丁寧さにはまた、自己の感情を統御することも含まれた。このようにして規律と自己管理が刷り込まれたのである。子供たちはまた、自分のことは自分ですることを教えられた。子供たちは、大部分執事によって育てられた。親子関係は、他の中間層や労働者階級におけるよりも緊密でなかったと結論してもよさそうである。親子の間には一定の距離があるのが予想できた。この距離は恐らく、厳格なしつけによって強まったであろう。

こうしたしつけや教育を通じて、子供たちは都市やブルクの環境における上層中間層の何ものにも書かれていないルールを学んだ。彼らは、夕食や公の場での振舞いを、家族や仕事の中での振舞いを、他の社会グループと自己を区別する趣味や様式を身につけた。義務や自己管理、ピューリタンの、ヴィクトリア朝の文化遺産の強調は、節制が義務であることを信じることに帰結した。豪勢に振舞うことはしてはならない、というのも、それが悪趣味や何か成り上がり者であることを示すものであるからである。成り上がり者は、そうしたルールを身につけていないのである。誰に敬意を示し、誰を無視するのか区別することも〔ルールに〕含まれる。

上層中間層はまた、小世界と大世界、親密な私生活と公的な場、家族と職場とを区別した。その境界はまた、ジェンダーをも区分した。それゆえにこそ女子が、最初に社会に出て必要な能力を育てられたのである。彼女らにとり、私的な社交の集まりの際に家族や友人を楽しませることができるようピアノをひければメリットとなった。もう一つの社会的メリットは、外国語の知識や古典教育の基礎部分の習得であった。このことは、彼女らが古典古代の文化のみならず、それに影響を受けた文化的表現にも親しむべきであったことを意味する。男子は、社会で働くことの準備をした。彼らは、例えば、上層中間層の社交の場で交際するために、基本的な社会的能力も必要であった。古典文化は、官僚としてのキャリアを考えている者にとってはより重要であった。将来の繊維企業経営者としては、経済や科学の知識も必要であった⁽³⁴⁾。

6 工業企業家としての中間層の家父長

工業を営む中間層の家父長は、パターン的な関係を大事にした。その目的は、誰もが同じ方向に

(32) 1901年5月31日付のダグマール・スワルツからカール・スワルツへの手紙【Släkten Swartz arkiv; Norrköpings stadsarkiv】。

(33) エルサ・フェルマン (Elsa Fehrman) とのインタビュー記録【Folkdivsarkivet i Lund】。

(34) スワルツ家文書を参照。

動き、企業や地域に帰属意識を持つようにすることである。もしそうすることができれば、熟練労働力を確保する前提条件も改善されたのである。ストライキやロックアウトが頻発して組織労働者の急進化が進んだ1920年代の社会的不穏な時期にあっては、中間層の家父長は、労働者を如何に統合するか、合意を作り出すかを議論した。多くの製鉄所のコミュニティでは、企業と従業員が個人的にコンタクトを持つ公式・非公式の場が、労働と資本が対立する状況を克服するために設けられた。企業主たちが信じるころによれば、ヘゲモニーは社会における他の階級の合意を獲得する統合を通じて確実なものとなる。統合と合意は、教育によって実現されるのであり、他の何よりも、労働者は、経済学や社会問題について学び、議論クラブにおいて取引や工業の問題を議論すべきなのである。ヘゲモニーへの道は、日々その地域で接し、毎日のように日常的な問題について会話をしたり議論したりすることを通じて固まりうるのである。企業が労働者に関心を示す限り、忠誠が増すことを見込める。[また、]「共通善」のためには、既存のシステムの中で連帯、団結および合意を打ち立てることが重要であることが強調された。スポーツ、とりわけサッカーが、1920年代初めからこのプロジェクトにおいてしばしば利用された。サッカーは、いわゆる「ブルク精神 (bruksanda)」あるいは我々精神 (we-sprit) を確立する重要な道具の一つであった⁽³⁵⁾。工業の指導者たちは、スポーツは階級の差異を無くし連帯を作り出す手段であるとの道具主義的な考えを持っていた。企業は、何より運動場を作るための土地を与え、財政的援助をすることにより、スポーツ活動を支援した。製鉄所コミュニティのオートヴィダベリイ (Åtvidaberg) では、製鉄所経営において意識的な戦略が追求され、サッカーは、コミュニティと企業との間の連帯を強化することにつながるブルク精神の涵養のために利用された。経営側が作り出そうとしたイメージは、調和に満ちた社会であり、モデルとなる社会であった⁽³⁶⁾。このモデル社会において、サッカーは、経営と住民を結びつける紐帯の機能を果たした。もう一つの大きな製鉄所であるサンドヴィケン (Sandviken) 社では、主人であるカール・フレドリック・イエーランソン (Karl Fredrik Göransson) は、スポーツが、「良き精神」すなわち「サンドヴィケン精神」を作り出す教育的な課題と密接に結びつき、その重要な一部をなしていると考えていた。彼によれば、スポーツは、名誉や公正、正直、思慮深さや機転が利くこととの感覚のみならず、良き道徳やフェアプレーの信念を各個人に根づかせるのであり、[それにより]彼・彼女は、他者と共感するようになるのである。カール・フレドリックは、もし「サンドヴィケン精神」が実現されていれば、製鉄所のコミュニティは莫大な物質的な富を手に入れるのみでなく、その社会に住み企業で働く者は「文化的かつ理念的により高度な生活水準」をも獲得するであろうと主張した⁽³⁷⁾。

クラブ活動から企業がいくつかのポジティブな効果を得るのを見ることは難しくない。スポーツにいそしむことは、規律や権威を尊重することを促した。そうした人々は、酒を飲むことやその他ギャンブルのような無駄な時間を過ごすことを控えた。[クラブの]メンバーは、規律や秩序が議論の定番の題目である集会文化を通じて、集团的かつ民主主義的な生活様式の中で鍛えられた⁽³⁸⁾。

(35) C.Ericsson 2004.

(36) T.Andersson 2002.

(37) イェーランソンの私信・第33巻 (Brevsamling, Vol.33) 【Släkten Göranssons familjearkiv ;Riksarkivet】。

(38) T.Andersson 2002; C.Ericsson 2004.

チームの選手は、キャプテンの命令に疑問をはさむことをしないように教育された。成功の秘訣は、ハードワークであり、堅実さ、規律そして秩序であった。企業のスポーツへの関心は、我々精神はなるべく多くの者において喚起されるべきと感じていたので、エリートのレベルに留まるものではなかった。こうしてスポーツを幅広く楽しめるようにすることで、製鉄所の個人個人の間に関連感を一層行き渡らせるように、施設が作られた。製鉄所の経営陣は、スポーツとりわけサッカーを、強力な社会的連帯を作り出すために地域コミュニティ精神を強化する手段として利用したのである。

7 工業企業家でかつ右派政治家

中間層の家父長は、政党政治の中でも活躍した。1904年は、スウェーデンの保守政党である一般有権者同盟 (AVF: Allmänna valmansförbundet) が設立された年であった。中間層の家父長は、適切にも労働者組織と同様に政党も不必要であると考えていたにもかかわらず、この過程において顕著な役割を果たした。彼らの理想とするところは、家父長と「彼の下にある」労働者は、外からの何らの介入がなければ、[介入があるよりも] 問題をよく解決できるというものであった。パターナルな福祉システムは、彼らに言わせれば、労働者階級には社会改良のいかなる必要もないことの明白な証拠であった。20世紀初頭の保守的な工業企業家である家父長にとり、彼が穏健保守主義であるか保守主義であるかに拘わらず、先祖伝来の企業やその他の遺産の所有者として振舞わなければならないことは使命であった。それは、家族そして企業、社会に責任を持つことであった。穏健保守主義の家父長と保守主義の家父長ではいくつかの重要な差はあったが、商工業の自由な営みを求め、社会主義に対して反対する闘争では団結していた。それは、台頭する労働運動は私的所有に対する現実的な脅威だと見なされたためである。彼らは、近代化を促進する諸活動に積極的に関与したが、同時に社会における急激な変化を回避する漸進的な民主主義的改革を推奨した。これからは、雇う者と雇われる者の間の対立は、「小さな地域世界」の中で最も良く解決されるものとして捉えるべきであった⁽³⁹⁾。企業の指導者と「彼の」労働者は、共通の福祉の実現を、緊密な信頼性に満ちた協力関係に依拠しているのである。20世紀初めの有名な右派の政治家であり、企業主であるクリスティアン・ルンドベリイ (Christian Lundberg) が表現したように、「団結すれば勝利し、バラバラとなれば敗れるのである」⁽⁴⁰⁾。

パターナルなシステムは、20世紀の初めの数十年の間に弛緩し始めた。大企業の勃興は、ビジネスについての新しい近代的な見方をもった新たな企業グループが急速に成長し、旧来の企業文化を衰退させることにつながった。大企業の勃興は、パターナルな連帯に何らの配慮もしない諸利害が結びつくことにもつながった。社会の近代化により、右派に組織された企業主は、次第に政治的民主主義的改革に反対することをあきらめざるを得ない状況となった。

民主化の目的は、すべての者に平等の権利を与え、物質的安全に与らしめ、社会階級間の差異を減少させることにあった。この民主化の過程は、近代以降の工業資本主義社会の最も中心的な問題

(39) K.Molin 1998.

(40) B.G.Hall 2005.

の一つ、すなわち社会統合の課題と密接に結びついていた。19世紀末の穏健保守主義にとっては、工業発展は福祉のみを作り出すのではなく、社会的悲惨の原因にもなると考えた。工業労働者の物質的および知的な悲惨さは、ひとつの脅威として理解された。それゆえ、労働者を社会の中に統合することが必要であった。彼らは、他の誰とも同じ権利と義務を持つべきであり、「一定の状況」では、国事にも関与すべきであった。穏健右派は、社会改革が社会的不穏を避けるために求められていると信じていた。彼らは、余りにも急激に進み、余りにも急進的で、ついにはすべての伝統的な社会構造を放り出すような社会的転換を恐れた。恐れるべきことのひとつは、企業主が、自身の社会的特権も自己の企業に対する支配も失ってしまうことであった。このような発展傾向に対抗する戦略は、急進的な批判が根拠のないことのように思えるように労働者を扱うことであった。保守主義の工業の指導者たちは、自由な商取引や工業の営み、市場経済、所有権や指導的地位などを維持する最も良い方法は、「小さな地域世界」において問題を解決することであると考えた。そうした世界においては、右派の産業民主主義の意見が成功を収めた。この戦略をもって、彼らはヘゲモニーを維持する前提条件を整えていった。「小さな世界」は、社会化の脅威や自由主義的市場経済の破局的な帰結から身を守る盾として機能する保守主義の基礎的な共同性を形づくった。この戦略は、社会民主主義者が、この種の問題をナショナルな政治のレベルで決定することを志向したことと鋭く対照性をなす位置にある。

8 変化する市民的公共性における新しい家父長

1930年代に、ブルジョワジーの家父長にとって状況が変化した。社会民主党は1920年代に政治路線を選び、「国民の家 (folkhemmet)」と名づけられたプロジェクトを開始した。新しい福祉国家において、国家は徐々に、市民社会とりわけブルジョワの家父長から社会的責任を引きあげていった。パターナルな諸関係は、将来的には、福祉の配分に企業や家父長が責任を持つという事実に基づくことができなくなった。

このような転換に伴い、新しいより職業専門家的な近代的工業経営者が現れた。彼らは、旧来の伝統的な家父長と異なり、学位・称号を持つという点ではフォーマルな能力や知識を持っていた。新しい工業経営者を際立って代表するのが、1930年代から50年代初めまで右派政党の国会議員であった(リリエホルメン社 Liljeholmens stearinfabrik ABの) ハラルド・ノルデンセン (Harald Nordensen) であった。ノルデンセンは、知性溢れ、家族や伝統に対し強い熱情を持っていたことで知られる⁽⁴¹⁾。殆どの工業経営者が政党政治を離れた時にあって、ノルデンセンは〔工業経営者の利害が政治的に〕組織されることの重要性を強調した。それが必要であるのは、さもなければビジネスの世界の重要な問題が政治のレベルで検討される望みがないからである。社会は、新しい法律や条令、統制を通じて個人の労働条件のみならず企業をますます規制するようになっている。ゲームのルールは政治家によって決められているのであり、それゆえ、工業経営者は、政治に参加することの重要性を認識する必要がある。繁栄するビジネスの世界は、政治的に活躍する工業経営者

(41) K.Norlander 2000; O.Ehrenkrona 2002.

を必要とするのである⁽⁴²⁾。ノルデンセンは新しい近代的な工業経営者を代表したが、同時にその保守的なイデオロギーにより、依然としてパターナルな関係を支持した人物でもあった。多くのスウェーデン企業と同様に、リリエホルメン社でも1930年代にはまだパターナルな戦略が支配的であった。ノルデンセンは、主要な株主であるので、企業を意のままにした。彼はまた工場の現場を離れなかったので、そこでの営みに日常的なコントロールを行使しえた。企業は、労働者とその家族が何かの危機に陥った時に経済的に支援し、治療や病院の費用をまかない、旅行や勉学に資金を与えるため、2つの従業員基金を組織した。企業はまた、従業員に休暇を過ごすことができる保養施設も提供した。

パターナリズムのイデオロギーの発展における第二段階は、もう一人の有名なスウェーデンの工業経営者である、クリスティアン・フォン・シュードウ (Christian von Sydow) によって主導された。彼は、ホルメンズ・ブルク社 (Holmens bruk och fabriks AB) の経営者であり、1960年代の右派政党を代表する国会議員であった⁽⁴³⁾。企業精神を持ち政治的に右派のパターナルな工業経営者たちは、彼と共に、社会民主主義者の社会化の試みに反対したのみならず、パターナルな諸関係をどのようにかして維持するために新たな機会を見出そうとした。彼らは、このことが産業民主主義を通じて可能になると展望した。保守主義の観点から見れば、産業民主主義は労使協調することと同じであった。シュードウは、保守主義者として、異なる社会階級が連帯することの重要性を強調した。彼は、階級闘争の思想には激しく反対した、というのも、自然に存在するものであるが限られた意味しかもたない工業経営者と労働者との利害対立を大問題にしてしまうからである⁽⁴⁴⁾。先に述べたように、「我々という感覚」や「ブルク精神 (製鉄所魂)」は、ブルジョワジーのパターナルなイデオロギーにおいて中心的な役割を果たしていた。右派が産業民主主義を成功への道と見なしたのも、それが従業員を企業に固く結びつけると考えたからである。産業民主主義は、例えば、従業員に技術や社会問題に関して影響力を与えるであろう。従業員に共に働く者としての感覚を与えるためには、工場経営陣が、従業員に、少なくとも企業の将来に関わる問題については絶えず情報を与えることが必要とされるのである。

彼の回想録には、他の企業を何度か訪れた際に、そこの経営者が「現場で共に働く者と会い、心地よい寛いだ会話をする彼の」義務を如何に無視しているかを記している⁽⁴⁵⁾。彼はまた、企業経営者が余りにも稀にしか現場に姿を見せていないと考えていた。彼の立場は、使用者にとって従業員と良き関係を取り結ぶことは重要な使命であり、「彼がそれを忘れてはいけない使命である」というものであった⁽⁴⁶⁾。シュードウ自身は、彼が学んだように振舞った。ホルメンズ・ブルク社の従業員は、彼を工業経営者のモデルと考えた。「彼は人気があり、毎日現場を歩き、労働者に挨拶をした。彼はそこで握手をし、労働者に調子はどうか、仕事はうまくいっているかなどと尋ねた」⁽⁴⁷⁾。

(42) H.Nordensen 1944.

(43) C.Ericsson 2002.

(44) C.von Sydow 1980.

(45) C.von Sydow 1980 ; C.Ericsson 2002.

(46) 前の注と同じ。

(47) C.Dominder&B.Horghby 1997.

ホルメンス・ブルク社では、快適さを増し、我々という感覚を作り出すためのいくつかの社会改良が展開した。例えば、従業員は、歯科医療を含む無料の保健・医療サービスが受けられた。従業員はまた、家庭菜園を持つのに会社から手厚い経済的援助を得た。企業はさらに、従業員が余暇に利用するため、サッカー場を含むスポーツ・センターの他、いくつかのコミュニティ・センターを設けた。企業経営者が成功し繁栄を手にしようとするならば、彼は従業員との相互作用の中で良き産業民主主義的関係を樹立せねばならなかった。共通の利害が、快適さと労働への満足を生み、それが生産増進と我々という感覚の強化につながるのである。

1960年代から70年代の間、右派政党と工業経営者たちは、彼らの保守主義的な観点から産業民主主義を確立しようとし続けた。この時期、ガラス製品工場のオーナーであるエリック・ホーヴハンマル (Erik Hovhammar) は、右派政党におけるビジネス利害の代弁者であった。彼は、1960年代末に設けられた党の特別機関の議長であり、右派政党の政策を財界に広める使命を持っていた。ホーヴハンマルによれば、企業家は、「経営を従業員が楽しむようにアレンジ」しなければならないのである⁽⁴⁸⁾。それは、良い給料と、企業の中での良好なコミュニケーションと、家庭がうまくいくことと、十分に余暇を楽しむことによってなされる。ホーヴハンマルが所有していたリンズハンマル・ガラス製造所 (Lindshammar glasbruk) では、家庭菜園を持ちたい従業員がいれば、手厚く援助を受けられた。企業はまた、従業員のために近代的な洗濯用の施設やサウナ、運動場を設けた。その表明された目的は、率直な所、労働者の快適さを増し、定着を促すことにあった。集会所である「人民の家」では、コミュニティの住民が集い、パーティを催し、映画や演劇も見ることができた。ホーヴハンマルは、仲間意識を強化するため、ダンスや音楽、飲み食いを伴う夏至祭のような祝宴を組織し、古き「ブルクの文化」と工場コミュニティの文化を結びつけた⁽⁴⁹⁾。ホーヴハンマルと右派政党によれば、産業民主主義は、その「根底の所」では、「従業員と使用者の間的人間的な親交、尊敬と差異の尊重」によって打ち立てられうるのである⁽⁵⁰⁾。従業員は、そこで働き生活する確固とした場所が必要なのであり、それを与える見返りとして、主人は、忠実な労働力を頼りにできるのである。こうしたエリック・ホーヴハンマルの社会観は、1950年代および60年代の右派政党における他の企業経営者にも共通していた。産業民主主義の概念におけるイデオロギーの骨格は、従業員を協働者とみなし、彼らを企業に統合することであった。

総括

スウェーデンの市民的公共性の形成は、1830年代に始まった。19世紀末葉まで、この公共性においては、男性かつ上層の中間層の家父長が中心的な役割を果たした。家父長とそれに従う者との関係は、殆どの場合、対面的な関係であり、従属者がその関係を受け入れ、きちんと仕事をする限りその安泰を当てにできる、父親に対するような社会的・経済的信頼性に基づいていた。19世紀末、

(48) *Filipstad and Bergslagernas tidning* 30/8 1956.

(49) *Smålandsposten* 17/5 1961.

(50) ホーヴハンマルの1969年12月11日の演説【Erik Hovhammars arkiv; Växjö stadsarkiv】。

市民的公共性は変化し始めた。今や上層中間層の女性も、象徴的な消費者やフィランスロピーの担い手、ネットワークの関係を強固にする存在としてみます中心の役割を演じるようになった。

労働運動の台頭は、市民的公共性の変化を促した。権威主義的な家父長は、勃興する労働運動の公共性からの挑戦を容認しなかった。同時に、大企業の勃興は、工業企業家個人が従業員と対面的な関係を取り結ぶことを困難にした。資本主義的な市場関係が、部分的には家父長的な関係に代替することとなる。状況はまた、世紀転換期の民主化の進展や1918年から21年の民主主義の勃興〔スウェーデンでは1909年に下院にあたる第二院について男子普通選挙権が導入された。第一次世界大戦末期よりの社会不安の中で、1919年にはすべての選挙での男女平等普通選挙権・被選挙権が議決された。最終的に21年には選挙権規定をめぐる憲法も改正され、女性も参加した初の総選挙が行われた。——訳者注〕によっても変わった。このような経済的、社会的そして政治的な過程が、市民的公共性と労働者公共性の間の新たな交渉を強制し、先見の明のある中間層の家父長が従業員との間にパターン的な契約を書き改めることにつながった。子を従属させ、善良であるが罰を与える父親は、労働者を教育し、企業及び企業がある地域との連帯や協働の下に階級対立を克服しようとする、新しい中間層の家父長によって取って代わられた。労働と資本の関係は、製鉄所間の一つの競争条件となった。権威主義的な家父長は労働運動を認めることを拒否した。それにより、一連の破壊的な対立を引き起こした。〔このような〕教育する家父長のやり方は、首尾よくいけば、こうした類の対立を回避した。対立の代わりに、彼らは、階級を超えた交渉と協力の概念を作り出した。これが「ブルク精神」と呼ばれているのだが、ブルジョワジーのヘゲモニー的地位という脈絡において理解されるべきである。

市民的公共性の第三の転換は、労働運動の公共性が選挙勝利によって国家装置を動かす権力を獲得し、福祉国家を建設し始めた1930年代に起こった。当時、教育する家父長の政策は、上層中間層の保守主義的な部分を覆っていた。市民的公共性と労働運動の公共性は、合理化や経済成長の概念をめぐる協力を始め、それが、社会的・政治的福祉諸改革の前提となった。クリスティアン・フォン・シュードウは、1950年代に、さらに労使協力政策を発展させ、その他の家父長は、ブルジョワジーのヘゲモニーの観点に従って解釈した産業民主主義を提唱することにより、ブルクの労使協力の概念に再び息を吹き込んだのである。

参照二次文献（未公開史料および新聞は注の中に記載）

Abrahamsson,Åke, *Ljus och frihet till näringsfång. Om tidningsväsendet, arbetarrörelsen och det sociala medvetandets ekologi – exemplet Stockholm 1838-1869*, Stockholm 1990.

Andersson,Torbjörn, *Kung fotboll : den svenska fotbollens kulturhistoria från 1800-talets slut till 1950*, Stockholm 2002.

Arosnson,Torbjörn., *Till det borgerligas försvar*, Stockholm 1996.

Björman,Eva Lis, *Catherines intressanta blekhet. Unga kvinnors möten med de nya kärlekskraven 1750-1830*, Stockholm 1998.

Bourdieu,Pierre, *Kultursociologiska texter*, Stockholm 1986.

Bourdieu,Pierre, *Konstens regler*, Stockholm 2000.

Båtefalk,Lars, *Staten, samhället och supen. Samhällsorganisatoriska principer och organisatorisk praktik kring dryckenskapsproblemet och nykterhetssträvandena i stat, borgerlig offentlighet och*

- associationsväsende ca 1770-1900*, Uppsala 2000.
- Dominder, Christer & Horgby, Björn, *Papperets mästare*, Norrköping 1997.
- Ehrenkrona, Olof, *100år med Handelskammaren i Stockholm*, Stockholm 2002.
- Ericsson, Christer, *Vi är alla delar av samma familj. Patron, makten och folket vid Nyby bruk 1880-1940*, Stockholm 1997.
- Ericsson, Christer, "Från storföretagare till företagsamhetens parti", in Nilsson, Torbjörn red., *Anfall eller försvar*, Stockholm 2002.
- Ericsson, Christer, *Fotball, bandy och makt*, Stockholm 2004.
- Eriksson, Eva, *Den moderna stadens födelse. Svensk arkitektur 1890-1920*, Stockholm 1990.
- Foucault, Michel, *Övervakning och straff: fängelsets födelse*, Lund 2003.
- Glete, Jan, *Ågande och industriell omvandling*, Stockholm 1994.
- Gunn, Simon, "The Public Sphere, Modernity and Consumption: New Perspectives on the History of the English Middle Class", in Kidd, Alan & Nicholls, David, ed., *Gender, Civic Culture and Consumerism. Middle Class Identity in Britain, 1800-1940*, Manchester 1999.
- Habermas, Jürgen, *Borgerlig offentlighet*, Stockholm 1984.
- Hall, Bo G., *Storsvensken som blev fredsfurste*, Stockholm 2005.
- Hallgren, Karin, *Borgerlighetens teater. Om verksamhet, musiker och repertoar vid Mindre Teatern i Stockholm 1842-63*, Uppsala 2000.
- Hjelm, Jonny, *Begåvningsreserven inom industrin*, Lund 1999.
- Horgby, Björn, *Surbullestan*, Stockholm 1989.
- Horgby, Björn, *Egensinne och skötsamhet. Arbetarkulturen i Norrköping 1850-1940*, Stockholm 1993.
- Horgby, Björn, *Med dynamit och argument. Gruvarbetarna och deras fackliga kamp under ett sekel*, Stockholm 1997.
- Horgby, Björn, "Identitet och vardag", in Nilsson, Hans, red., *Norrköpings historia 1900-talet*, Norrköping 2000.
- Johannesson, Eric, *Den läsande familjen. Familjetidskriften i Sverige 1850-1880*, Stockholm 1980.
- Johansson, Ingemar, *Strejken som vapen. Fackföreningar och strejker i Norrköping 1870-1910*, Stockholm 1982.
- Jordansson, Birgitta, *Den goda människans från Göteborg. Genus och fattigvårdspolitik i det borgerliga samhällets framväxt*, Lund 1998.
- Langland, Elisabeth, *Nobody's Angels. Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*, London 1995.
- Magnusson, Ulf, *Från arbetare till arbetarklass: klassformering och klassrelationer i Fagersta – ett mellansvenskt brukssamhälle ca 1870-1909*, Uppsala 1996.
- Molin, Karl, *Den moderne patriarken*, Stockholm 1998.
- Nordensen, Harald, "Om ideologiers nytta", in *Ekonomisk revy* 1944.
- Nordlund, T., "Den humanistiske och välvillige patriarken", D-uppsats in Historia, Vt 1999, Mälardalens högskola, institutionen för humaniora 2005.
- Norlander, Kerstin, *Människor kring ett företag*, Göteborg 2000.
- Nyström, Lars, *Potatisriket. Stora Bjurum 1857-1917: jorden, makten, samhället*, Göteborg 2003.
- Olsson, Björn, *Den bildade borgaren, Bildningssträvan och folkbildning i en norrländsk småstad*, Stockholm 1994.
- Plymouth, Birgitta, *Fostrande försörjning: fattigvård, filantropi och genus i fabrikstaden Norrköping 1872-1914*, Stockholm 2002.

- Qvarsell,Roger, *Kulturmiljö och idéspridning. Idédebatt, bokspridning och sällskapliv kring 1800-talets mitt*, Stockholm 1988.
- Sheiban,Hossein, *Den ekonomiska staden. Stadsplanering i Stockholm under senare hälften av 1800-talet*, Stockholm 2002.
- Sondén,Per, *Hugo Tamm till Fånöö*, Stockholm 1925.
- Stenlås,Niklas, *Den inre kretsen*, Lund 1998.
- Stråth,Bo & Torstendahl,Rolf, "State Theory and State Development: States as Network Structure in Change in Modern European History", in Torstendahl,Rolf ed., *State Theory and State History*, London 1992.
- von Sydow,Christian, *Med industri och politik i bagaget*, Stockholm 1980.
- Tillhagen,Carl Henrik, *Järnet och människorna*, Falköping 1981.
- Winberg,Christer, *Fabriksfolket. Textilindustrin i Mark och arbetarrörelsens genombrott*, Göteborg 1989.
- Åberg,Martin, *En fråga om klass? Borgerklass och industriellt företagande i Göteborg 1850-1914*, Göteborg 1991.
- Åberg,Martin, *Samförståndets tid. Konflikt, samarbete och nätverk i svensk lokalpolitik*, Lund 1998.

(Christer Ericsson エーレブロー大学教授)

(Björn Horgby エーレブロー大学教授)

(いしはら・しゅんじ 東京大学大学院経済学研究科准教授)

〔訳者解説〕

本稿は、クリステル・エリクソンおよびビヨン・ホリビィ両氏による東京大学経済学部における講演 (Ericsson,Christer & Horgby,Björn, *The Middle Class Patriarch in the Bourgeois Public*, Discussion Paper, CIRJE-F-571, Center for International Research on the Japanese Economy, Faculty of Economics, University of Tokyo,2008) の翻訳である。ただし、ごく数箇所については、著者の承認の下に修正し、原文との差異が生じている。また、文章中の () は、原文でも () が用いられている場合とその直前の語の原語を示す場合に用いた。[] は、訳者が意味を通りやすくするため補ったものである。

両氏とも、現在、エーレブロー (Örebro) 大学の歴史学教授である。エリクソン氏は、ブルクの paternal 的な労使関係の歴史の変遷を扱った研究 (C.Ericsson 1997) から出発し、ブルクの労使関係とスポーツの有機的な結びつきからスポーツ史研究 (C.Ericsson 2004)、paternal 的な使用者と保守主義との結びつきから保守主義研究 (Ericsson,Christer, *Kapitalets politik och politikens kapital*, Stockholm 2008) へと対象領域を広げている。ホリビィ氏は、繊維工業都市ノルシェーピング (Norrköping) を主なフィールドとして、19世紀半ばから20世紀前半までの労働者文化の歴史的展開をテーマに多くの著作を公刊してきた (例えば、B.Horgby 1989 ; B.Horgby 1993)。現在は、文化現象から社会や政治のあり様を把握するという研究視角を、第二次世界大戦後の大衆文化や若者文化を対象とした分析 (Horgby,Björn, *Rock och uppror. Amerikansk, britisk och svensk rockkultur 1955-1969*, Stockholm 2007) にも適用し、精力的に研究を発表し続けている。

本稿は、およそ一世紀半にわたるスウェーデン近現代史をパターナリズムという概念で捉えなお

すことを試みた意欲的な論考である。例えば、従来、19世紀前半に形成されたスウェーデンにおける市民的公共性については、身分制的秩序からの解放や自由という側面が強調されてきたのであるが、著者は、市民的公共性と私的親密圏双方を貫く同時期の家父長制的な社会の構造を明らかにしている。これは、ジェンダー研究の進展を踏まえたもので、家父長制的な社会構造の存在という点では、スウェーデンと他の西欧諸国の近代市民社会に共通の側面を指摘していると想像される。とはいえ、今日、スウェーデンがしばしば男女平等化に関して先進的であると指摘されるように、ジェンダー秩序のあり様やその歴史的展開については、国によって大きな差もあるものと思われる。今後、そうした共通性や差異性に注目した比較史研究を進め、スウェーデン社会をその中に位置づけ、その特質や限界を明らかにしていくことが望まれる⁽ⁱ⁾。

また、本稿は、19世紀末葉から企業におけるパターナリズムが台頭する社会民主主義労働運動を次第に受容していったのだが、その後、単に受容するだけでなく、社会民主主義政権の下での福祉国家建設あるいはその繁栄のために不可欠な役割を果たすようになっていったことに注目している。スウェーデン福祉国家は社会民主主義のみでは語れないのであり、その拠って立つ社会構造や歴史的展開を理解する上で、パターナリズムや保守主義といった要素を無視できないと主張していると言えよう。ちなみに、スウェーデンでは、現在保守主義をめぐって大きな歴史研究のプロジェクトが進行しているが、エリクソン氏はその中で企業と保守主義の関係を担当している。先に触れた著書 (*Kapitalets politik och politikens kapital*) はその研究成果である。スウェーデンの近現代の歩みをしばしば社会民主主義労働運動の側面からのみ見がちな我が国のスウェーデン研究にとって資するところが少なくないと考え、本稿をここに翻訳した次第である⁽ⁱⁱ⁾。

（本稿の翻訳は、平成20-22年度科学研究費基盤研究（B）「国際的連関の視点から見るフィランソロピーの比較研究」〔課題番号20330040：代表者 岡村東洋光〕による研究成果の一部である）

- (i) 本稿は、残念ながら、スウェーデン福祉国家の生成・展開過程でのジェンダー秩序についてパターナリズムの概念を用いて分析していない。スウェーデン福祉国家の生成・展開をも社会におけるジェンダー秩序が支えていたことを告発している、以下の文献に代表されるイヴォンヌ・ヒルドマンの一連の研究の存在を指摘しておく。Hirdman, Yvonne, *Att lägga livet till rätta: studier i svensk folkhemspolitik*, Stockholm 1989; Dens., *Med kliven tunga. LO och genusordningen*, Stockholm 1998.
- (ii) この保守主義研究プロジェクトは、セーデルテルン大学 (Södertörns högskola) の同時代史研究所 (Samtidshistoriska institutet) を拠点とした、「1904年から2000年までの右派：近代化の味方か敵か (Högern 1904-2000: Moderniseringens vän eller fiende?)」である。なお、拙稿「企業から見たスウェーデン・モデル—ボルボ企業委員会 (1)-(4)」, 東京大学『経済学論集』第74巻第3・4号, 2008年, 第75巻第1・2号, 2009年〔(4)は未刊で掲載予定〕は、企業 (ボルボ) とそのパターナルな労使関係の成立に焦点を置いてスウェーデン福祉国家を支えた中央集権的労使交渉システムの展開を見直そうとした研究である。参照していただければ幸いである。